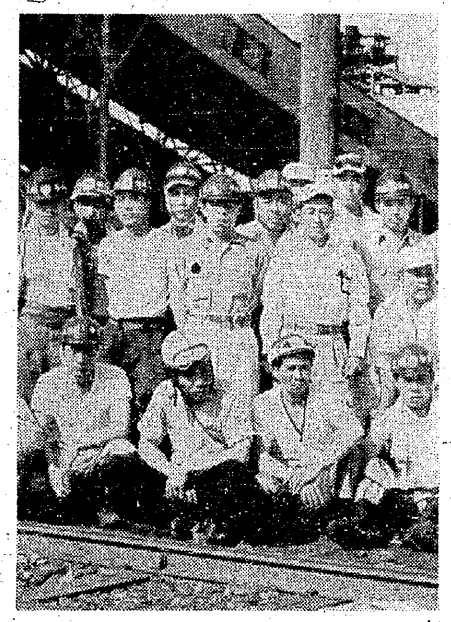
原告団

遺族・CO裁判、災害責任追求、特集号

第19号

写真右は、会社が退けてやっと社宅のわが家へ帰る森清香さん。帰宅は毎日ほとんど夕方六時。たった一人ぐらしでも、子どもたちの愛情が包んでいるから暖かい。下は、三池闘争ごろの忠利さんの面影。後列、立っているまんなかの人。



血の海に浮いた遺体

敷かれていたのはペラペラの荒ムシロだった

やっぱり夫の命を返してもらいたい

遺族・森清香さんの

×　×　×

その後

思い出

爆発からまる一日過ぎた、翌日――十日の午後三時過ぎのことでした、体育館（三井鉱山の施設―遺体安置所だった）で父ちゃんの遺体をさがし当てましたのは。

父ちゃんの顔にはぼーっと桜色さえさしていて、思わず「わアー美しさ。ほんとにこれが死んでいる人の顔だろうか」、と疑いたくなるほどでした。

そのとき私は、悲しくも何ともなく、涙一滴流れるでもなかった自分が、どう考えても不思議でなりません。きっと、突然降りかかってきた余りにも大きな不幸のために、そのときの私は魂の抜け殻になっていたのですね。

火葬場が足りなかったのでしょう、私たちは十一日の夜も通夜をしていました。その晩のことだった、と思います。私はあぶなく、「あっ」と声をあげるところでした。ちょうどそこに（と、取材者が座っているあたりを指で示しながら）安置していましたお棺の隅から、敷居伝いに尾をひきながら血が流れ出ていたのです。

「これは大変」と、あわててお棺の蓋を開けましたところがどうでしょう、父ちゃんの遺体は血の海のなかに浮いていたではありませんか。見えない背なかのあたりに、ケガしていたのですね、きっと。

もう目もあけられないほど死臭がむんむん立ちこめていました。

そのなかでよく見ますと、あの世に向かって旅立ってゆく父ちゃんのため、フンドシのほかになるほど手甲、脚はんこそあてられていましたものの、着せられているかんじんの経カタビラなんか袖さえなく、まるでチャンチャンコでした。

それにおどろいたことに、父ちゃんの遺体の下に敷かれていたのは、ペラペラの荒ムシロだったのですよ。

まるで虫ケラ扱い

――。なさけなくてなさけなくて……。私は泣き泣き立ちこむる死臭のなかで、血に染まった父ちゃんの遺体を静かに返しながら、きれいにふきあげてやりました。

火葬に送り出せましたのは、その夜も十時をまわったころだったようにおぼえています。

ともあれ子どもたちを側に呼んで、父ちゃんにいよいよ最後の別れをさせようと思いながらお棺の蓋を、私は開けました。ところがこれまたひどいことに、ぼーっと桜色さえさして、あんなにも美しかった父ちゃんの死に顔が、いつの間にそうなりましたか、もう真っ黒に変っていて、人に見せられる様相ではなかったのです。

もう、子どもたちを呼ぶどころの話ではなく、私はあわてて、地域分会の人びとに釘を打ってもらって、遺体を送り出しましたけど――私にはあの日の思い出が今も焼きついていて離れません。

何と申しましても、私に忘れられないのがやっぱり、千二百名の人たちを守るために闘いました、三池闘争のときのことですね。

主人はもともと活動家ではなく大変口数の少い人でしたから、会社側からそこをつけこまれて「第二にこいこい」と説得を受けていました。

一度なんか主人は、ついうっかりごまかしの電話で呼び出されまして、腕づくでどこかへクルマで連れ去られようとさえしましたけど、「今が俺にとって一番大切なときだゾ。ここで負けたら、今までがんばってきたことが無意味になる。よし……」ということで、とうとうがんばり抜いて帰ってまいりました。私はそのことを聞きい合い「よかった、よかった」、と口に出してしまったほどでした。私はそのときほど、常々は黙っている父ちゃんの人間としての偉さを思ったことはありません。労働者として、首切られた人たちを裏切ることはできませんでしたから。

見てください（と、部屋のかもいの上を指ざしながら）、父ちゃんの死亡退職に対しまして、太田薫元総評議長・古賀定元炭労委員長・宮川睦男元三池労組組合長の三人の方の名前でいただいた表彰状です。

「あなたは資本の独善と権力の反動に対決する全労働者の戦いであった三池闘争、及び就労後の不当極まる差別切り崩し、組合弾圧・保安無視等のファッショ的攻撃に対しても……勇敢に戦い抜いてこられました。……あなたの功績は不滅です。闘いなかばに倒れられた貴方に対し、心から敬意をこめ、茲に記念品を贈呈し表彰いたします」。

ここに誉かれている一言一句がほんとに父ちゃんにささげられていることを、私は今つくづく誇りに思っているのですけど、でもあの表彰状を中央委員会の席でいただきましたときは、つい「これが停年で退職するときのことであれば、父ちゃんもどんなにかうれしかったろうに……」、と考えてしまい、皆さんといっしょに〝炭掘る仲間〟をうたうときなんか余りのくやしさから、とうとうとらえきれなくなって、声をあげて泣き出してしまったのでしたが。

×

螢光灯の光がそうさせるのか、語り終った森清香さんのまるぼちゃの顔はいくらか青ざめて見えたものの、二重まぶたの小さな両眼からのぞかれるいつもの優しさはそれでも消えていなかった。

道けわし

述べるまでもなく、清香さんは三池の遺族の一人。大正九年十二月二十七日生れだから、ことし五十四歳。

同じ年生れの忠利さんとの結婚が、昭和二十二年三月二十三日。ともに二十七歳のときのこと。忠利さんは戦地から引き揚げて来たあと、三川鉱の安全灯の職場で働いていた。戦災で両親をはじめすべての身うちをうしない、そのうえ家もまったくの焼け野が原と化していたから、忠利さんは文字通り天涯孤独の身となり、三井鉱山の寮に起居していたのだった。

そのころ清香さんにはなるほど兄弟こそあったものの（その兄弟も、戦後バタバタ死亡）、すでに両親は世になかったから、奇しくも不幸な人間同志の縁だったのである。

結婚後しばらくは、清香さんが独りで住んでいた実家で暮らし、翌二十三年八月八日には、現住所の荒尾市緑ケ丘社宅楓町八十八棟へ。

長男信博さん、長女博子さん、次女美知江さんの三人の子どもが誕生。この子どもたち、一家が突然不幸のどん底につき落とされたあの大爆発のとき、中学二年、同一年、小学四年というときだったから、清香さんは目の前の世界が急に真っ暗になった思いだったという。まして、性来体が弱く何から何まで夫の忠利さんに頼り切って添うて来た十六年間だったからよほどこたえたのに違いない。

でも会社が、遺族の生活対策として誘置したといわれる荒尾アソニット工場（ニット類の製造販売）が設立されると、清香さんは病院に通い通い、工場に勤める身となった。はじめの日給、訓練手当の三百円に過ぎず、その分はすべて治療費に消えていったというやむを得ずも、忠利さんの退職金四十五万円、弔慰金四十万円、労災保険からの給付七十三万円（賃金の千日分）を食いつぶしてゆく暮らしが続いていったが……

今の想い

今ようやく子どもたちも成長。長男信博さんが高校卒業後今大阪のスーパーに（すでに婚約）。長女博子さんが結婚して平原に。次女美知江さんが厚木県立病院（神奈川県）に看護婦として勤務。

「森さんは子ども運に恵まれなさった」、とは近所のもっぱらの評判。事実また、三人の子どもたちから「独り住まいの母さんのために……」と贈られた、すこぶる大型のカラーテレビが部屋にでんと据えられている。

とかく病弱な体に悩みながらもよくぞ苦しみと闘い、そしてうち勝ちながら今日まで歩いて来た清香さん。思わず、可愛いいその口をついて出た言葉は――「体が弱かったばっかりに、何もかも、苦労という苦労をいっしょくたに背負わして、あの世へ送りやった父ちゃんに申しわけなくて……。一日でようございますから、いくらかなりとゆっくりとなりました今の暮らしの気分を味あわせてやりたくてなりません。それにつけても私はますます声を大きくして、会社にいってやりたいと思いますね――、うちの父ちゃんを返してくれ、と」

清香さんのこの叫び、果たして無理なことか。

×

ご遺族・患者家族の皆さん、なまなましい手記を寄せて下さい。